

日本英語教育史学会 会報

300

2020 年 12 月 12 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第280回研究例会報告

2020 (令和 2) 年 11 月 21 日 (土), 第 280 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態による開催されました。参加者は 17 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 熊谷允岐氏 (立教大学大学院生) が「英学史・英語教育史研究における英単語集の定義—他の英語教材との比較を通して—」というタイトルでお話しされました。続いて, 川嶋正士氏 (日本大学) が「日本の英文典における Complement の導入について」というタイトルで発表を行いました。司会は河村和也氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は熊谷氏, ②は川嶋氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①日本で英語を学ぶ人のほとんどが利用すると思われる単語集を研究されていて, 非常に興味深かったです。研究対象を明確にするための, 単語集の定義や分類方法の説明が非常に分かりやすく説得力がありました。また, 学習者の使用方法には依拠せずに, 単語集の作成者が意図とする使用方法に依拠するのは客観的で良い方法だと思いました。 (匿名希望)

◆①ご発表のテーマである「(英)単語集」を定義することについては, 恐らく「辞書・辞典」を定義すること以上に難しい作業になるのではないかと思います。用語と概念とが常に 1 対 1 の関係にあるわけではなく, トップダウン式に単語集とはこれこれの条件を具えたものであるとして資料を探そうとすると, 例えば, 書名をもとにすれば, 「単語集」以外にも, 「語

箋」「節用集」などなど限りなく出てきて, 完全に捨てるのだろうかと心配になり, 逆にボトムアップ式に, 現物としてこういうものがあった, それを集約すれば最大公約数的に「単語集」の性格規定が可能になるというものだろうかと気になります。ご発表中に言及された点を基に考えると, 例えば, 幕末の開成所『英吉利単語篇』は 1500 語足らずの名詞が部門別に並べられたもので, 見出し語のみの「語彙リスト」ですが, 明治になるとこれにカナによる発音表記と訳語とを与えた『通俗英吉利単語篇』(1871) などの参考書がいくつか刊行されており, こちらは「単語集」と分類されることとなりますが, 両者は別個のものと性格づけられるのでしょうか。開成所「単語篇」の方には, 恐らく幕末明初の学習者が書き込んだのであ

ろうと思われませんが、墨で訳語を書き込んだものを見かけることがあります。これは、明らかに単語学習の跡を示すもので、単語集の条件に「語彙を記憶するための教材」という点を挙げるのであれば、少なくともその使用目的においては「語彙リスト」であるよりは、「単語集」の範疇に含まれることになるのではないのでしょうか。「語林大成」についても単語集とする考え方を紹介されましたが、これと「興学小筈」とはどのように分けられるのでしょうか。併せて、「語林大成」を単語集と捉える考え方を受け入れるということであると、同書は「語彙を記憶するための教材」とであると解釈されるのでしょうか。或いは、逆に、同書はこの性格を有していないがゆえに、単語集ではなく辞書であると規定することができるのでしょうか。検討すべき課題は多いと思いますが、デジタル化されたものを含めて、できるだけ現物資料に当たられ、その書名や内容構成要素を然るべき尺度の下に分析されて、明解な拠り所をお出しただくよう期待しております。(Dragon)

◆②Complement の扱い方について、歴史的な変遷とともに非常に精緻な分析を拝聴することができました。文法用語の名称や扱い方、またその概念は、明治時代を通して様々な変遷を辿ったようですが、当時の学習者たちが、どれだけその変化についていくことができたのかについて、個人的に気になりました。

(ポレポレ)

◆②わが国の英文典において Complement の概念・用語がどこに淵源を有するか追究しようとするご発表で、興味深くうかがいました。斎藤静なども自身の文法教科書の指導書に「Complement」といふ語は術語として適当でないから用ひない方がよからうと云ふ人がある」が、「日本の英学界で Complement と称するのは動詞と名詞及び形容詞の特別な補足関係を指すので、異つた品詞を用ひながら然かもその用法は同一であるから、この用法を指称す

る術語として適当なものである」と述べて、文法専門家による議論とは分けて、学校英文典中での取り扱いへの姿勢を見せておられますが、そこには併せて「殊に Complement」といふ術語は Swinton の English Grammar (1884) が日本に於て盛んに用ひられた時代からの good and old な time-honoured な術語である。強ち旧慣を墨守する意味から採用したものでないことをことわつて置きたい(『Sundry Note on English Grammar』昭和 8)と記し、Swinton を挙げておりますので、今回取り上げられた Cox から始まるルートや Swinton の影響などがどのように伝播普及したのかを明らかにしていただければと願っております。なお、ご発表の Cox 英文典に近い時代のものということで手許のものをいくつか見てみましたが、J. M. B. Sill, *Practical Lessons in English: A Brief Course in Grammar and Composition*. (A. S. Barnes, 1880) も面白いかと思えます。主語+動詞のみでは成立しない文において 3 番目に来る基本要素 (essential part) として Object-Complement と Attribute-Complement を挙げ、また、SVOC については、‘Sometimes the object of a verb is modified by a noun in apposition (or by an adjective) which, at the same time, completes the meaning of the verb. . . .’ とし、これが受け身文になると、その modifier が attribute-complement になると説明しております。これなどをあわせ見ると、このあたりの時代に Complement の概念が popularity を得てきたということでしょうか。ご発表の参考文献に挙げられておりませんでしたので、ご参考までに紹介いたしておきますが、残念なことに、本書は、ナショナル・リーダーと同じく Barnes 社の発行ながら、わが国ではあまり用いられなかったように思います。(Dragon)

◆②今日はお話を大変面白く伺いました。Complement の導入時期がさらに遡るとい

ご指摘は新しい知識となりました。補語の概念を当時の人がどのようにとらえていたのかは興味のあるところで、それによって指すものが違ったり、名称が工夫されたりしていたようで、その変遷が整理されていて参考になりました。最終的に補語の概念の導入はどのような思考法に基づいて行われたのか興味があるところです。文構造の理解が深まって補語の概念が導入されたということでしょうか、そのように絞り込まれる要因は何だったのでしょうか。そうなる前は最終的に補語とみなされる要素はどのような理解を受けていたのでしょうか。(M.N.)

◆③パソコンとインターネット環境があれば、全国の方々と簡単につながることができる点は、オンライン開催でしか実現できない長所であることは当然でしょう。ただ、70 分の発表を 2 つオンラインで聞くのは、やはり疲労が溜

まりやすく感じました。発表者の側からしてみても、相手の反応が見れない点、ネットワーク上の問題などを考えると、一刻も早いコロナ禍の収束が願われるばかりです。(ボレボレ)

◆③Zoom によるオンライン例会に初めての参加となりましたが、本年度前期にオンライン授業を求められることがなかったために Zoom 初挑戦となって少々緊張しました。発表者側に不具合が生じたりして、進行役を務められた河村先生には気疲れされたのではないのでしょうか。やはり、普段の例会のほうがご発表前後の研究談議から雑談までもが楽しめて、個人的には早く通常の形に戻ってほしいなといったところが本音で、「白河の清きに魚の住みかねてもとの濁りの田沼こひしき」でもよいからと思うところ大です。(Dragon)

<発表を終えて>

熊谷 允岐 (立教大学大学院生)

第 280 回研究例会では、大変お世話になりましたことを心より御礼申し上げます。今回の発表を通して、少しでもわたしの研究内容をお伝えすることができていれば幸いです。

本発表では、「単語集」ということばに注目し、それが先行研究でどのように扱われているのかを分析した後、英学史・英語教育史研究における定義付けを試みました。「単語集とはどのような教材なのか？」と聞かれれば、多くの人は、何かしらの説明を行えると思います。なぜなら、単語集ということばは、わたしたちにとって比較的馴染みがあり、イメージしやすいものだと考えられるからです。しかし、馴染みがあるからこそ、その概念は各個人の中に漠然と存在するだけにとどまり、今日まで用いられていたのかもしれませんが。わたしはその点に着目し、学術的な立場から単語集を定義することで、類似の領域を研究する方々に有用な指標を提示することを目指しました。発表でお伝えした単語集の定義は、皆様にとって当たり前なものに聞こえたかもしれませんが。しかし、各個人の捉え方に委ねられていたと考えられる単語集の要件を、学術的な立場から言語化したことには、一定の意義があるのではないかと考えています。

最後になりますが、ご参加の先生方より有意義なご質問、ご意見をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。本発表で学んだ点を踏まえ、今後も博士論文の執筆に励ませていただきます。

<発表を終えて>

川嶋 正士 (日本大学)

「5 文型」の研究に本格的に取り組んでから 7 年が過ぎた。先行研究のない中で理論的・史的研

究を行ってきたが、今回は珍しく先行研究のある発表だった。

1996 年に発表された先行研究に比べ、オンライン資料も充実した環境で行う研究が新規な発見を提示できるのは当然であるが、単なる起源遡上や安易な批判に終わることなく、学界に寄与できる内容を示す・・・意気込みで始めたところ・・・途中で回線がきれてからずいぶんあわててしまい・・・伝えたいことがどのくらい伝わったか定かでない。

慎重を期して、大学の回線を使ったが、今まで、何百人単位の会議や講義で安定していたのが、初めて不具合が生じた *rare occasion* に参加者の皆様を遭遇させてしまい、申し訳なくおもいます。

発表が終わってからも研究は深化し続ける。発表でも触れたが、Cox 文典の初版を入手したところ。発表で紹介した部分にも表現の差異が見られる。さらには Bain が SVOC の文の能動態に Complement を認めたことの問題と関連して、Complement の定義を厳密にすることにより、初出文献の再定義から、その背景、さらには後の統語分析の発展と関係した研究へと、今後地平線が広がるのが期待される。

Nesfield に関する中原の翻訳書も、視点を変えると、発表で触れた箇所以外に Complement の本質的な議論につながる記述が見いだされた。これらについて、いっこうに出口がみえない中で中間発表を続けることに 7 年前の研究開始時と変わらないときめきを覚えることができるのは研究者冥利である。

最後に、研究例会がオンライン開催になってから、河村事務局長に大変お世話になっています。この場をお借りしてお礼申し上げます。

日本英語教育史学会「会報」300号の歩み

日本英語教育史学会会長 江利川春雄

「日本英語教育史学会会報」は、2020 年 12 月発行の月号をもって記念すべき 300 号を迎えました。これを機に、これまでの「会報」の歴史を振り返り、編集・発行を担当された皆様の献身的なご苦勞に対して深い感謝を捧げると共に、学会の共有財産として、会員各位の積極的な寄稿・情報提供をお願いしたいと思います。

本学会の前身である日本英語教育史研究会は、出来成訓会長（宇都宮大学：肩書きは当時）のもと、1984 年 12 月に発足しました。その当初から、事務局長の茂住實男先生（拓殖大学）によって「日本英語教育学会ニュース」が編集・発行され、年に 10 回、会員に郵送されました。例会発表へのコメントと会務連絡が紙面の中心でした。

当時は会員も少なかったため、『月報』[正しくは「ニュース」]に載せる月例会報告での意見・印象の執筆者があまりに少なく恰好がつかないので、1 人が 2 人分書くこともあった」とのことです（出来成訓「学会創立 20 周年に思う」『日本英語教育史研究』第 20 号、2005）。

1993（平成 5）年 4 月発行の「日本英語教育学会ニュース」第 81 号より、編集・発行担当は音在（おとざい）謙介先生（拓殖大学）に交替し、同時に古い拓本の文字を貼りあわせた「日本英語教育史学会月報」という渋いロゴが一面を飾るようになりました。ヘッダーの「ニュース」とロゴの「月報」とが併存する不思議な構成でした。

文学派の音在先生の尽力でエッセイや書評など紙面も徐々に充実し、出来成訓会長による「先達を語る」が第 84 号（1993 年 5 月）から第 119 号（1997 年 8 月）まで断続的に 7 回連載されまし

た。私が初めて依頼されて寄稿した雑文は「思い出の酒 龍力『米のささやき』(姫路)」という吟醸酒の話でした(1993年11月の第87号)。こんな遊び心も許される会報だったので。

1996(平成8)年11月発行の第113号より、編集・発行は江利川春雄(鈴鹿工業高等専門学校)に交替しました。このとき、タイトルを「日本英語教育史学会月報」に一元化しましたが、ヘッダーを見ると、1~2ページは「月報」ですが3~5ページは「ニュース」という古い尻尾を付けています。完全に「月報」に統一されたのは翌年1月の114号からでした。

私は編集後記に「『保存しておいたら何かの役に立つ』月報を目指したいと思います」と書き、英語教育史研究に役立つ情報、新刊紹介、エッセイを意識的に増やしました。副会長だった伊村元道先生(玉川大学)には「英語教育史研究文献案内(1)年表・(2)事典・(3)通史・(4)書誌・(5)雑誌」を第140~144号(1999年12月~2000年5月)に寄稿いただきました。いま読み直しても、研究上のヒントに満ちあふれています。私も「英語教科書史へのアプローチ」を第123号~125号(1998年1月~3月)に3回寄稿しました。若手にも積極的に紙面を提供すべく、拓殖大学の院生だった田口亜紀さんの「ある大学院生の日記」を11回掲載しました(第125~149号)。1997(平成9)年3月の第116号からは最終面に会員の著書の広告(各1万円/年)を載せ、収入源としました。当時の月報の内容は、広告等を除き、すべて学会紀要『日本英語教育史研究』に転載されていますので、ぜひご覧ください。

ほぼ毎月行われていた例会の参加者コメントの入力、寄稿の依頼、文献・資料紹介、学会彙報などの編集・印刷・発送はたいへんで、伊藤裕道先生(日本大学)に東京例会でのコメント入力をお願いし、研究室に出入りする学生たちに封筒詰めや切手貼りを手伝ってもらったこともありました。

2000(平成12)年5月の全国大会で、会長が出来成訓先生から伊村元道先生に代わりました。私は副会長を拝命し、学会を日本学術会議の登録団体とすべく面倒な手続きに忙殺されました。それらを契機に、21世紀がスタートした2001年1月の第150号より、月報編集・発行のバトンに河村和也先生(東京女学館中学校・高等学校)にお渡ししました。その後、第184号(2004年11月)から馬本勉先生(県立広島大学)、第257号(2013年6月)から若宥保彦先生(秋田大学)へと受け継がれていきます。

なお、月報200号(2006年5月)の特集「月報200号に寄せて」には「アンタがいなくても地球は回る」(音在謙介先生)、『日本英語教育史学会月報』題字にまつわる話(河村和也先生)が掲載されています。ぜひご覧ください。(つづく)

日本学術会議新規会員任命拒否の撤回を求める声明

2020年10月11日

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会
会長 江利川 春雄

第25期日本学術会議の新規会員の任命に際し、日本学術会議が推薦した105名の新規会員候補者のうち6名に対し、内閣総理大臣は、何ら具体的な理由を示すことなく、任命を拒否しました。

この行為は過去の政府方針に反するものであり、政府による任命権の恣意的な運用に道を開く危険なものです。何よりも、日本学術会議の独立性・中立性を損ない、日本国憲法が保障する学問の自由を侵害し、研究者を萎縮させる不当な行為であると考えます。

私たちは内閣総理大臣に対し、今般の任命拒否を決定した理由を開示するとともに、速やかにその決定を撤回し、6名の候補者を会員に任命することを強く求めます。

(付記) この会長声明は日本英語教育史学会理事会の承認を得て発表するものです。

》) 事務局より

会員のみならずには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方には、この会報をお届けする時期に合わせ、郵便もしくは電子メールをお送りいたします。年末を迎えお忙しい時期とは存じますが、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

なお、会費の納入状況等ご不明の点は、お手数ですが事務局(会計担当)までお問い合わせください。

| |
|--|
| 問い合わせ先 事務局(会計担当) 河村和也 電子メール: membership@hiselt.jp 電話: 0824-74-1727 (研究室直通) |
|--|

*事務局よりご連絡を差し上げる際、membership.hiselt@gmail.com のアカウントを使うことがあります。あらかじめご承知おきください。

*事務局を置いている研究室の電話は、通常「留守番電話」となっております。どうぞご用件をお残してください。

》) この先の研究例会

新型コロナウイルスの感染状況については、依然として不透明な状況が続いています。移動の制限は解除されたとは言え、対面による会合を催すことは困難と考え、9月以降、今年度の研究例会については原則として Zoom を用いたオンラインの形態により開催することとします。

◆ 第 281 回研究例会 2021 年 1 月 9 日(土) 14 時より

◆ 第 282 回研究例会 2021 年 3 月 20 日(土) 14 時より

オンラインでの会合には相当の疲労がともないます。Zoom を用いた例会の開催にあたり、通常の研究例会よりも短い発表も可能としました。発表時間は次の 2 種類です。

70分(研究例会発表規程に準ずる)

25分(全国大会発表規程に準ずる)

Zoom を用いるに際し、参加希望者をあらかじめ確定しておく必要があります。以下の手順を踏んでいただくこととなりますのでご承知おきください。

(1) 公式ウェブサイト上に用意される《参加申込フォーム》に必要事項を入力し送信してください。

- (2) Zoom ミーティングのリンクやパスワードが記載された事務局からの《電子メール》を受信してください。
- (3) 研究例会の当日、定刻になりましたら電子メールに記載されている《リンク》より Zoom ミーティングに入ってください。

インターネットの環境をお持ちでない会員のみなさまにはご参加いただくことがかなわず、まことに心苦しく存じております。現況に鑑み、どうぞご容赦くださいますようお願い申し上げます。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100～200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (7 月発表希望であれば 4 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

》 英語教育史フォルダ

- ◆ 広島文理科大学英語英文学研究室 / 英語教育研究所編『英語教育』(1936～1947 年、全 42 冊)の復刻版第 I 期 1-5 巻(第 1 巻第 1 号～第 4 巻第 4 号: 1936 年 9 月～1940 年 3 月)が、ゆまに書房より刊行された。各巻とも本体 15,000 円。監修は江利川春雄、解題は江利川春雄・上野舞斗(共に本学会会員)。後半の第 II 期(全 3 巻+別巻)は 2021 年 4 月刊行予定。
- ◆ 若林俊輔(著)、若有保彦(編)『若林俊輔先生著作集③: 英語 4 技能(聞く・話す・読む・書く)の指導』が一般財団法人語学教育研究所より刊行された。定価は 1,200 円(税込)。本書は語学教育研究所の次の URL から注文が可能。送料は 1 冊につき 200 円。
http://www.irlt.or.jp/modules/liaise/index.php?form_id=12

日本英語教育史学会 第 281 回 研究例会

日 時: 2021 年 1 月 9 日(土) 14:00～17:00

オンライン開催: 詳細は学会ホームページをご参照ください (<http://hiset.jp/>)。

研究発表①

「新制高等学校発足期の入学者選抜における英語の位置付けについて: 広島県を例に」

河村 和也 (県立広島大学准教授)

【概要】発表者はこれまで、新制高等学校の入学者選抜における学力検査に英語が導入された経緯を自治体ごとに調査し、数次にわたって報告してきた。本発表は、広島県の公立高等学校を対象とするものである。

英語が初めて導入されたのは 1952 (昭和 27) 年度であり、その嚆矢となったのは宮城・福井・岡山の 3 県であった。この動きは全国に拡大し、6 年後、つまり 1958 (昭和 33) 年度には、ほぼすべての自治体で公立高等学校の入学者選抜における学力検査に英語を課すまでにいたっている。

広島県は 1953 (昭和 28) 年度の入学者選抜から英語を取り入れ、全国で 12 道県に過ぎなかった英語導入自治体のひとつに名を連ねている。ただし、広島県の学力検査には他県には見られない大きな特徴があった。本発表では、その特徴を詳細に報告するとともに、新制高等学校発足期の入学者選抜が大きく揺れ動いたさまを描き出したい。

研究発表②

若林俊輔の英語教育論：後期（東京外国語大学時代）の特徴

若有 保彦 (秋田大学准教授)

【概要】若林俊輔 (1931～2002) は 1960 年代～2000 年代初頭に活躍した英語教育者である。若林の単著及び共著の論考、討議 (対談、座談会、シンポジウム等) やインタビュー等に登場した記事は、これまで確認できたものだけで 500 本以上存在しているが、この数は非常に多いと言える。例えば、『英語教育 fifty』(2002, 大修館書店) の付録の CD にある「特集執筆回数ランク表」によれば、若林の執筆回数は 71 回で過去 50 年間で最も多かった。また、若林の論考は目的論、教育課程論、教材論、方法論、評価論、教師・学習者論、教育史など、英語教育の様々な分野に及んでいる。

本研究は「若林俊輔の英語教育論」の全体像及びその発展の過程を明らかにすることを目的としたものである。この目的の達成のため、若林の論考及び討議、インタビュー等において登場した記事を前期、中期、後期、末期の 4 つの時期に分けると共に、これらをテーマ毎に分類し、各分野に関する主張はいつ頃から行われたのか、主張が変わった場合、その変化はいつから生じたのか等を調査した。

今回の発表では、若林が 1980 年 4 月から 1993 年 3 月まで勤務した東京外国語大学時代を「後期」と定義し、この時期の約 250 の論考、紙上討議やインタビューにおける発言を分析した結果を報告する。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

EDITOR'S BOX 会報は本号で節目の 300 号に到達しました。これを記念し、本号から数回にわたり歴代の会報編集担当者による連載を始めます。／もうすぐ 2020 年が終わろうとしています。新型コロナウイルスの第 3 波はまだ終わりが見えない状況です。今日 12 月 9 日は一日の感染者数が 2,837 人と過去最高を更新しています。／昨年の Editor's Box で「来年はいろいろなことに感動できるような心の余裕を・・・」と書きましたが、残念ながら今年はコロナの影響による授業形態の度重なる変更で時間の余裕がなくなり、またコロナの感染防止対策等で心の余裕も持つことができませんでした。／一方で、今年ほど平穏な時間の大切さを痛感した年ありません。来年のこの時期が平穏を取りもどしていることを心から願っています。みなさま、どうかよいお年をお迎え下さいませよう。(若)

◎ 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)